

「話 談 室」

「健 康」

藤 原 章 司

ここ数年、健康に対して関心が高まって
いるようです。健康に関する書物は次々と
出版され、健康専門の月刊誌もかなり好評
のようです。私が以前勤めていたところで
も、「中高年と運動」、「運動と栄養」という
講演会を開いたところ、多くの人々が集ま
りました。健康に関心を持ち、かつ日常生
活にも注意を払う。まことに結構なことな
のですが、少し気になることがあります。
それは、多くの人が健康、医学、栄養学な
どに関して、かなりの知識をもっているに
もかかわらず、その知識が必ずしも正確で
はない、ということです。

前述の講演で、私は「運動と栄養」を担
当したのですが、その時に出たいくつかの
質問から、そういう感じを受けたわけです。
コレステロールについて二・三の質問があ
りましたので、それを例にしてみましょ
う。栄養学におけるコレステロールは、細
胞膜や神経組織の構成に関与し、また胆汁
酸、ホルモン、ビタミンDなどの材料とな
るなど、必要な物質として扱われていま
す。また、数年前からコレステロールのう
ちのある種のもは、動脈硬化を防止する
働きをもつことが指摘されてきています。
ところが、質問に出てくるのは、コレステ
ロールはどんな食物に多いのかとか、運動
によってコレステロール値は下がるのか、

といったものばかり。即ち、コレステロ
ールとは、動脈硬化、高血圧、ひいては脳血
管障害、心疾患などを引き起こす悪者であ
る、というのが一般的な知識になっている
のです。コレステロール摂取量が多くても
血中の値が必ず高くなるわけではないこと
も、ある種のコレステロールは動脈硬化を
防ぎ、そのコレステロールが血中に多い人
々が“長生き症候群”と呼ばれていること
も、そして基本的にはコレステロールは生
体にとって必要であることも、すべて知識
とはなっていないのです。このコレステ
ロールに対する誤解が脂肪全体への誤解へ、
さらに食生活についての偏見へと広がって
いる人も見られました。同じような例は他
にも見られます。医師に高血圧と診断され
たため、運動によって克服しようと考え、
さっそく運動を開始したまではよいです
が、頑張りすぎたため、運動中の最高血圧
が200mm・Hgを越えているといった人に何
人も出会いました。運動に、血圧を下げる
効果がみられる、という一面だけが知識と
して備わっているが故の、反養生となっ
ているのです。

健康に関する知識は量的にも、質的
にも、かなりのものになってきているよう
ですが、以上のように、その知識が不確かな
もの、不十分なもののため、逆に健康を阻

害する原因となっている場合が多く見受けられます。一億総半健康時代といわれ、それを反映して各種健康産業が、ますます栄

えていく中でのこの現状。健康教育に携わる者として、考えてゆかなければならない問題です。

科学的概念と学生の「幼児化」

林 俊 夫

以前、学生の動向を語る場合に「学生はやる気がない」とよく云われたが、最近の場合には「学生は幼児化している」と一見奇異とも思える言葉がしばしば出てくる。その具体例として、例えば学内で「かんけり」や「かくれんぼ」をしているとか、会話・行動のなかに自己中心、主客未分の傾向があるとか等々である。一方、私が担当している一般教育及び専門（物理）の授業のなかで、科学的な概念の形成過程をなるだけ論理的に説明してきたのであるが、学生への効果はここ数年特に減少してきている。勿論、私の授業のやり方に問題なしとは決して言うつもりはないが、そこで扱う抽象的な概念形成や論理的思考が困難であると云う学生の状況と、いわゆる「幼児化」の傾向とが後述のように、決定的に関連をもっているのではないだろうか。

科学は対象相互の本質的關係や内面的構造を明らかにしようとするものであるから、いわゆる「科学的概念」は構造化され、体系性をもち、自覚化され、随意的に利用され得ることをその特質としている。それに対して、日常の生活経験のなかでいわば自然に習得されていく、いわゆる「生活的概念」は、構造化されておらず、自然発生的、非自覚的、非体系的を特質とする。と

は云え、後者の概念形成の源泉となるものは、一般には事物の感覚的刺激だけでなく内言（思考の言語）をとおして現実の分析・総合が行われ形成されるのであるが、子供の場合にはこの内言の深化自体がまだ浅く直接的経験と不可分に結びついており生活経験に大きく依存している。それでは両者の概念の発生のメカニズムは同じであろうか。ソビエトの心理学者ヴィゴツキーによれば、前者はその体系性や自覚性によって後者から本質的に区別されると同時に、その発生の仕方に於てもちよど逆の道筋をたどるといふ。^(*)そして前者の形成には後者の発達に質的転換をせまるような或る種の飛躍（発達の最近接領域の拡大？）が必要であり、それを支えるのが学校における科学的系統的教授——学習であるというのである。即ち、「科学的概念」は学校教育の産物であり、「生活的概念」は就学前教育の産物である。

私は自信もないままに、以上のような僅かな受け売りの知識を借りて考えるのであるが、現在の大学生は、先ず第一に書けず、読まず、考えずと云う言葉で代表されているように、^(**)言語活動の内言化が極めてお粗つであること、第二に後期中等教育での受験競争等の悪へいにおざわいされて、

「科学的概念」の獲得の体験とその積み重ねが殆んど無くなってきたこと、従って「生活的概念」から「科学的概念」への移行がその質量ともに「幼児化」の段階にあるのではないかと推論したくなるのである。このように考えてくると、私の授業で問題にしている学問体系の結び目と学生の認識発達の節目とが完全にずれていると判断せざるを得ないのである。

しかしながら、「科学的概念」は学校教育の産物である。このことを再び言うのは、教える側の指導性と責任を強調したいからである。今までは、研究と教育の一体性のもとに「教官の創造的研究を基盤に、学生の問題意識を喚起し講義を行う」と或る意味では漫然と云われてきたが、現在の学生の状況に照らしてみれば、これだけではダメなような気がしてならない。学生の問題状況が前述のようであれば、学生の自発性

の限界を見極めたいうえで、教師の指導性を媒介としてその限界を乗り越えさせるような観点が必要だと思うのである。即ち、「科学的概念」を固定した絶対的なものとしてとらえず、「教育の研究」とおしてその概念内容を吟味し科学自体をとらえ直すこと、ひいては各学問体系と結合させた「教育科学」を構築していく努力をすべきではないだろうか。初等中等教育の場では、民間の教育研究グループの手によって、立派な成果を挙げていると聞くが、現在の大学生が上述のような状況であれば、今や大学という場に於ても、この努力をしない訳にはゆかないのではあるまいか。

* 岩波講座「子どもの発達と教育」第5巻105頁、同第3巻293頁。(1979)

** 昭和54年11月6日付朝日新聞「わたしの云い分」(東大名誉教授大内力氏との対談)

ある地理屋の根をなす部分

稲田道彦

地理学者をその学問にかりたてている興味のあるものとも題すべきであろうが、そのように書けるほど学問的に整然と整理された体系にのっとった話題でもないし、常日頃の偶感を文字にしようとする程度のものでこの題にした。

地理学はずい分と古くから続いてきた学問である。古代ギリシアにもう地理学という分野が存在していた。そこで行なわれた地理学は主に自分達の住んでいる場所ではみられない現象を整理して記述するもので

あった。今でいうならルポルタージュにあたるものが、その中心であったようである。しかし、単なる記載でないことがそれを学問にまで高めたのである。自分達の住まう地表面、空に輝く太陽・月といった理解の範囲を越える自然、そしてその自然という不思議な舞台の上で活動している人間の占める位置について科学的で哲学的な説明を加えようという意図が大きく存在していた。ここでの科学的とは論理関係を明らかにしようとすることであった。だから地理

学の方法としては、ギリシア人の常識の範囲を越える他の地方でみられる現象を数多く取り上げ、その一つ一つに解釈なり、その時点での最高限度に論理的な因果関係の説明をするものであった。今から考えると、全く的はずれの点もあるが、すばらしい洞察力をその説明に加えているものも見られる（例えばヘロドトス¹⁾の著書）。その場合の記述の単位は把握するのに一番簡単な国とか地方という、平面的な広がりである場所であった。この場所でもって区分して考えることは今まで地理学のある大きな前提として続いてきた。

その後も、ある特定の場所でおきる特徴的な事象を書き連ねて、それらに論理的な解釈をほどこす学問的態度は継承されてきたのであるが、これに大きな波紋を投げかけるのが、近代の科学革命の動向なのである。科学が依って立つ論理的な思考が現象の生起する法則の追求に向いたのである。ここで問題となっているのは現象唯それだけである。ところがその視点を現象のみでなく、それがおきている舞台の方にも置いていた地理学に、ある種の変向が迫られたのである。しかもその舞台が例えば戦争が相次いだ時代の国家領域のように歴史的又は人間的な要素によって形成された境界に囲まれた領域は自然環境の差により画された領域に比べてことにそうであった。

これら一般的に地誌の方法と呼ばれる地表面での現象の記載をする学問方法に加えて、個々の現象について研究する方法（系統的とも一般的とも言う）が始まった²⁾。総合的な方向を踏襲しようとする方向と、科学として成り立つために法則定立的な個々の現象がおきる要因を細かく分析していく研究方法をとる方向とが、学界内部にで

きた。現在では、科学の一般的な発展の方向をうけて、法則定立の方向に向かって、大きく揺れながらであるが徐々に進んでいる。その際、系統地理学で扱う対象は従来からの研究対象の一部を取り上げることになる。もともと地表面のすべてを取り上げてきたのだから、取り上げ方はいくらかもあり、焦点のしぼり切れないという様相を呈する。大きく自然と人文の両分野に分けられているが、もう一つつっこんだその中身は、非常にバラエティに富んでいる。研究対象を狭い範囲に限れば限るほど、他の現象との関係を考慮しなければならなくなる点もあらわれてくる。そして分野を狭く限れば限るほど、対象を深く追求すればするほど、地理学の潮流に残されそうになっている総合的に対象を把握する方向が、地理屋の精神の根の部分として深く根づいているような思いにとらわれる。現代科学の中において、場所的な広がりの上でおこるあらゆる現象の相互関連をして現象の複合体を表現し、そういった総合的な現象がおこった原因、そして将来への展望などを考究するには、よほど卓抜した方法が望まれると思われる。

総合的にとらえるという意味で、常に思い浮ぶ人達がいる。ダーウィン、フンボルト、ニュートン、カント、リッター、リヒトホーフエン、ラッツェルらの18・19世紀の学者達である。彼らは何らかの形で地理学への関りや影響をもった人達である。その時代の最高のそして最先端の知識を一身に集め、それらを総合して自分の学問を作った。別の言い方をすれば、あらゆる学問に一人の人間が通じることのできた幸せな時代の人達である。現代は分野の分化が進み、一人で全てに通暁することはむしろかし

いが、何らかの形でこの研究態度を継承しようとするのが学際的な傾向ではないかと思われる。地理学はその歴史からして、ミニ学際とも言うべき、研究方法に対する考察をその内に育んできた。そしてこの学際的な方法、つまり総合的に考えようとするのが、地理学研究の潮流にとり残されそうになって以来、ノスタルジーとして、そして将来のカタストロフィックな展開を期待するものとして、常に地理屋の胸中にあるように思われる。つまり、帰納でも演繹でもない科学的な説明方法、もしかするとアブダクション³⁾に近い形をとるかもしれないが、地理屋のもやもやした思いを、

すっきりした形で示してくれる碩学を待望しているのではないかと思われる。

- 1) ヘロドトス、松平千秋訳(1972) 歴史上・中・下、岩波文庫
- 2) このように単純な二分律で語ることは、大いに危険であるが、また実際にはこういう単純な形でなかったが議論を簡単にするためにあえてこうした二分律で述べた。
- 3) 渡辺慧(1975) 知識と推測——科学的認識論 2 演繹と帰納の数理、東京図書。

一般教育学会設立大会に出席して

坂 口 良 昭

昭和54年12月8日(土)、東京の空は珍らしく抜けるような青空で、穏やかな心地よい日和であった。会場の東京農林年金会館の壮大な近代建築にまず目を見はりながら中へ入ると、受付には香大や東京農工大の先生方がきびきびした応待振りを見せていた。

10時から学会設立総会がはじまり、議長に日本大学法学部の杉山教授が選ばれ、堀地先生の経過報告をはじめ、会則の制定、事業計画、本年度予算、昭和55年度大会の開催地と、その時期、役員の出選など順調に進行して、予定通りここに一般教育学会が発足した。その間問題になったのは団体会員の扱いくらいのもので、大会準備の周到さは見事であった。会長は大阪大学人間科

学部の扇谷尚教授(教育学)で、会長講演も格調高く熱意に燃えたものであった。一般教育制度が発足して約30年、やっとこのような学会が出来たのは、遅きにすぎたといえるかもしれぬし、あるいは期が熟したといえるかもしれぬが、ともかく誕生の喜びを心から表明されていた。会場を見渡すと、大きなホールが満員で、後で受付の先生方に伺ったところによると、予想を大幅に上廻る参加者の数で、用意した印刷物が間に合わず嬉しい悲鳴をあげたとのことであった。この満員の盛況は午後の講演とシンポジウムに引き次がれ、活発な討議が展開された。

まず特別講演は、桜美林大学理事兼教授の清水畏三氏による「一般教育の将来像—

ハーバード計画と対比して一」というタイトルのものであった。氏は元ジャーナリストとしての経験や、全米の大学を歩いて調べられた内容をベースに話された。アメリカの大学が日本より一足早く1920年代に大衆化路線を進め、いわゆる General Student が急増したのに対し、大学は多様化と課外活動の活発化、そして General Education の重視によって対応した。大衆化とともに大学での専攻と就職内容とは関係ないのが当りまえとなり、専門職教育よりも、より価値観とか人間形成的側面が重視されてきた。ハーバード大学でも今年9月全面的なカリキュラム大改正が行なわれたが、大学院よりも学部教育を、専門よりも General Education を重視したものとなったのも、一時アポロ計画やベトナム戦争の全盛期に専門教育中心に偏った大学路線への反省によるものである。清水氏は最後に、今後の一般教育カリキュラムでは是非取り入れたいものとして、作文教育、実技を伴う芸術教育、社会奉仕や道徳的教育分野を挙げ、また3分野12単位づつという分散型カリキュラムも見直す時機にきていると述べられた。

シンポジウムは関西大学の友松芳郎教授が「学的基礎をもつ一般教育はいかにして確立できるか」、東北大学の阿部宏教授の「教養部改革と一般教育」、宮崎大学の高須金作助教授の「外国語単位の規格化——語学教育の役割をめぐって——」の3つの報告があった。

友松教授のは日本の大学の伝統がドイツ的専門主義に傾いたもので、戦後導入された一般教育が大学になじまないことをあげ、専門至上主義の跋こが文化的危機をま

ねいているとし、人生観、世界観の形成を志向する一般教育担当学部こそ大学の中核とならねばならない。その学的基礎造りこそこの学会の課題であると述べられた。阿部教授は教養部改革問題の直面する問題点をあげ、格差是正を目指すため教養部大学院のことについて述べられた。高須助教授の報告には会場から一番多数の意見が出され、一般教育課程でいかに語学教育が切実な悩みを抱えているかがわかった。宮崎大学での Toffel を利用した到達度目標の規格化、単位化に対し賛否の意見が多く、語学教育の実用主義か教養主義かの根深い対立がうかがえた。ともかく、僻けて通るわけにいかない重要な問題であるので、扇谷会長によって、この問題が今後の学会の統一テーマの一つとしてとりあげられた。

シンポジウムに続く懇親会も盛会で、まずは学会発足日にふさわしい盛り上がりがあった一日であった。しかし、同時にこれからの学会の行く手も決して楽観できるものではない。今までのような個人有志の熱意と奉仕によりかかったままでは、早晚行きづまるであろう。なによりも事務局を中心とした組織体制の確立が急務である。また懇親会でも教養部長クラスの人が目立ったが、職制で義務的に参加する人々が中心となつてはやはり学会の本来の機能は充分発揮できないこととなる。なにはともあれ当日の盛会はそのまま日本の一般教育の悩みの深さを反映したものとも考えられるので、喜こんでばかりもいられない気持ちである。

おわりに堀地先生はじめ、設立の中心となられた諸先生の御努力に深甚の敬意を表するものである。